東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

現代社会における漢文の役割：道家の思想を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 六谷, 明美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173724

現代社会における漢文の役割

―道家の思想を中心に―

The role of Chinese writing in modern society

―Focusing on the idea of Daojia―

国語科　六谷　明美

〈要旨〉現代生活とのつながりが薄れてきた漢文を、社会や自分との関わりの中で生かしていくにはどうすべきか。授業で扱った道家の思想を中心に考察を行った。また、このような視点に立ち、現代における漢文の役割を考え、それを十分発揮させるような授業のあり方を考えると同時に、現状における問題点を探っていった。

〈キーワード〉道家の思想　発想のヒント　座右の銘　教養　学校教育

はじめに

令和四年度から始まる新学習指導要領の中には

「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。」[*1]とある。

確かに高校生の古典に対する学習意欲は低い。漢文についても、生徒たちは遙か昔の中国のことを勉強しても、現代の生活には役に立たないとよく言う。かつて日本において、漢文は公式文書に使用され、漢文を読むことが教養の一つとされていた。しかし、現代では実生活に漢文を用いることもなく、時代の流れから置き去りにされた感もある。

そこで本論文では、現代において、漢文、つまり中国の古典が、社会や個人とどう関わっているのかを考察し、実際に社会や自分との関わりの中でどのようにすれば漢文を生かしていくことができるか考えていきたい。今回は「古典B」の教材として取り上げられている道家の思想を中心に考えていくことにした。老子や荘子を中心とした道家の思想は、儒家の思想とともに中国の二大思想として、人々に大きな影響を与えて来た。この道家の思想を、現代に生かすことは可能なのであろうか。また、生かすことができるとすれば、私たちは教室でどのような授業を展開すればよいのだろうか。特に道家の思想は、難解な面もある。現代語訳だけでは理解することが難しい文章を、どのように生徒たちに理解させていけばよいか、その方法も合わせて授業のあり方について模索していきたい。

1　道家の思想と現代社会との関わりについて

まず、現代社会において、中国の古典である道家の思想はどのように捉えられているのだろうか。ここでは、世界と日本という二つの視点から取り上げてみた。考察に用いたのは、授業で道家の思想を取り上げる際、いつも生徒に配布していたプリントである。この中から、漢文が社会や自分自身に関わっている箇所をピックアップし、考察を試みた。これらのプリントは、授業の中で、できるだけ難解な思想をわかりやすく説明するための補助教材として、作品を読んだ後、生徒と一緒に読んできたものである。

(1) 海外の人から見た道家の思想

ドイツ文学者の中野孝次は『いまを生きる知恵』の中で、『老子』がヨーロッパの国々で多くの人に読まれていることを次のように紹介している。[*2]

「ドイツ語だけでも十数冊もあるのには驚きました。英語訳はもっとあるようですが、ドイツでも英国でもそれだけ老子は読まれているのです。関心を持って読まれている。それも指導的な立場にある人が好んで読んでいるそうです。」

「これというのも、ヨーロッパ文明が「有」のほうにばかり行った結果、それはたしかにすばらしい科学をつくりあげましたが、現在はどうも行き詰まってしまっている感がするからだと思います。そこで、東洋の「無に帰れ」という説に大変魅力を感じて、ドイツでも英国でも読まれ出したのではないかと私は思っています。」

「いままでわれわれが基準としてきたヨーロッパ風の考え方では、物事の行為の価値は為すことにあるわけです。何事かを成し遂げる、事業を興す、声明を出す、意見を述べる、仕事の上で成果を上げるなど…ところが、世の中には為すよりも為さないほうがよいということや場合のほうがいくらでもあることを、老子は教

えてくれます。私も老子を読んで初めて、この東洋の為さずして為す、…老子は教えてくれます。」

中野孝次は、ヨーロッパにおいて、近代の発展が行き詰まった結果、『老子』が読まれるようになったと述べている。日本も、戦後、経済優先で突っ走ってきた。ものが豊かになり生活も向上してきたが、これによって失ってしまったものもあるだろう。人生がうまく回っている時は問題ないが、ひとたび社会の歯車から落ちこぼれ、自分の生き方が見えなくなった時、人はどうしていけばよいのだろうか。今から二千年前の思想家がすでにそのような行き過ぎた社会をどう乗り越えるか、また、人間本来の生き方を取り戻し、いかに心豊かに生きるかについてのヒントを与えてくれている。『老子』の文章は、異なる時代のものではあるが、現代を生きる私たちにもヒントになるのではないか。

また、『老子』の日本語訳を書いた加島祥造は、『タオ―老子』のあとがき[*4]に次のように書いている。

(A)「老子」は人間にある宇宙意識と社会意識の間のバランスを語る。…この大きなバランスを「老子」の言葉から感じとると、人は安らぎやくつろぎの気持[ママ]の湧くのを覚える。

(B)この大きなバランスの視点から老子は、人間のする行き過ぎに警告を発している。たとえば、近世以来の西洋（欧米）社会では、所有（possession）、自己主張（self-assertion）、支配（domination）の三つの態度が、国にも人びとにも優勢となり、今にいたってはそれがわが国にも波及している。「老子」の時代も同じであり、彼はそれを戒めて、「争ウナ」「自カラ足ルコトダ」といった言葉をいくども発している。これらの言葉はいま、個人にたいして有用であるばかりか、二十一世紀の世界全体への警告となっていると言える。

(C)老子『道徳経』が真に革命的なのは、すべてが「復帰」―The return process―の働きのなかにあると説いたことだ。それも天から地への復帰ばかりでなく、社会も人間も根に帰る―すべてが、自然から分離する前の根源へ帰ると説いたことである。」

「老子は二千五百年前に中国にいた人とされている。彼の思想が二十世紀のはじめに、欧米社会に甦った。Zen（禅）とTao（老子）は西洋の知識人の間に深く受け入れられて、いまもそれがつづいている。これは欧米の人と話せばすぐに実感される。この欧米に甦ったタオイズムの波が、東洋人である私に達したのだった。」

積極的に政治に関わろうとした儒家の思想とは反対に、道家の思想は、世の中や政治に絶望した知識人が、人間らしく生きようとする際の拠り所ともなってきた。陶淵明は官職を辞し、田園の居に帰り、自然の中で生きることに人間の本来の姿を見いだしている。加島祥造は『老子』の文章を読むと「人は安らぎやくつろぎの気持の湧くのを覚える。」と述べている。『老子』の文章は、二千年以上たった今でさえ、経済活動で疲れた人々の心を癒やしてくれるのである。

(2) 現代における日本人と道家の思想の関わり

次に、現代において、日本人は道家の思想を、社会や自分との関わりの中で、どのように生かしてきたのだろうか。漢文を学んでも役に立たないと感じている生徒に、ぜひ紹介したいのは、漢文で学んだものが、新しい発想のヒントになったり、座右の銘として生きるための拠り所になっていたという話である。

①発想のヒントになった漢文

ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹は、『荘子』の「渾沌」という話をヒントに、素粒子についての発見をした。これは漢文が新たな発想のヒントになったというエピソードである。本文は次の通りである。

南海之帝為儵、北海之帝為忽、中央之帝為渾沌。儵与忽時相与遇於渾沌之　地。待之甚善。儵与忽謀報渾沌之徳。曰、「人皆有七竅、以視聴食息。此独無有。嘗試鑿之。」日鑿一竅、七日而渾沌死。

【書き下し文】

南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇ふ。渾沌之を待すること甚だ善し。

儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて曰はく、「人皆七竅有りて、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たん。」と。日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死す。

この話は、無為自然なるものに人為を加えることの愚かさを批判した荘子特有の寓話である。儵と忽が、のっぺらぼうの渾沌のところに遊びに行ったところ、とても歓待してもらったので、渾沌にお礼をすることにした。二人は、渾沌には人間が持っている七つの穴がないので、お礼として渾沌に穴をあけることにした。一日に一つずつ穴をあけていったところ、七日目に渾沌は死んでしまったという話である。

生徒たちにとっては、渾沌が死んだ理由も、この話が意味しているものも、初めはよくわからない。けれども、この話には生徒を引きつけるインパクトがあるのか、いつもとても興味深く聴いてくれる。授業では、「無為自然」の象徴である渾沌に、「人為」の象徴である七つの穴をあけてしまったことによって、渾沌は死んでしまったという寓意を説明する。荘子は根源的な状態にあることで、精神の自由を獲得できると考えており、渾沌の未分化の状態を、本来人間のあるべき姿と考えているのである。その後で、いつも次のような湯川秀樹の話（『自然に論理をよむ』〈日本の科学精神 2 自然と論理〉[*5]）をプリントで紹介する。

「小学校へ入る前から、漢学、つまり、中国の古典をいろいろ習った。といっても祖父について素読をしただけである。もちろん、はじめは意味が全然わからなかった。…『史記』などの歴史書は別としてあって、何となくおしつけがましい感じがした。…中学校に入るころには…『荘子』を特に面白いと思うようになった。…それからずいぶん長い間、私は老荘の哲学を忘れていた。四、五年前、素粒子のことを考えている最中に、ふと『荘子』のことを思い出した。」

として、湯川秀樹はこの「渾沌」の文章を引用し、次のように書いている。

「私は長年の間、素粒子の研究をしているわけだが、今では三十数種にも及ぶ素粒子が発見され、それらがそれぞれ謎めいた性格を持っている。こうなると素粒子よりも、もう一つ進んだ先のものを考えなければならなくなっている。…一番の根本になるものは、おそらくある決まった形をもっているのではなく、またわれわれが今知っている素粒子のどれというのでもない。さまざまな素粒子に分化する可能性をもった、しかしまだ未分化の何物かであろう。今までに知っている言葉でいうならば渾沌というようなものであろう、などと考えているうちに、この寓話を思い出したわけである。」

と述べ、「素粒子」の研究の過程で、この寓話が考えるヒントになったことを次のように述べている。

「最近になって、この寓話を前よりも一層面白く思うようになった。儵も忽も素粒子みたいなものだと考えて見る。それらが、それぞれ勝手に走っているのでは何事も起こらないが、南と北からやってきて、渾沌の領土で一緒になった。素粒子の衝突が起こった。こう考えると、一種の二元論になってくるが、そうすると渾沌というのは、素粒子を受け入れる時間・空間のようなものといえる。こういう解釈もできそうである。」

発想のヒントとなるものは、決して専門の分野の研究だけから得られるものではない。理系の人にとっても中国古典が、発想のヒントになることは大いにあり得る。だからこそ、理系、文系という道筋を決めることなく、あらゆる分野のことに興味関心をもっていれば、それだけ、その人の引き出しが増えることになり、いろいろな発想のヒントを得られることになるのであろう。湯川秀樹の理論が、このような中国古典から生まれたということは興味深い。そして、彼は最後に次のように述べている。

「必ずしも科学の発達のもとになりうるのはギリシャ思想だけだともいえないように思う。老子や荘子の思想は、ギリシャ思想とは異質なように見える。しかし、それはそれで一種の徹底した合理主義的な考えであり、独特の自然哲学として、今日でもなお珍重すべきものをふくんでいると思う。」

日本人は昔から素読によって中国古典の素養を身につけてきた。湯川秀樹にとっては中国の思想が、ノーベル物理学賞を受賞する発見のヒントになったので

ある。先祖が読み伝えてきたものが「知」の蓄積の結果として、単に昔話としてではなく新しいものを生み出す原動力にもなり得ることを、ぜひ生徒にも伝えていきたい。

②漢文の言葉を座右の銘に

次に紹介するのは、戦前の大横綱であった双葉山が、漢文の言葉を座右の銘として、稽古に励んでいたという話である。双葉山は、『荘子』の「木鶏」の揮毫を稽古場に掲げ、朝晩、額の前に座って、自ら「木鶏」になるべく修行に励んだという。本文は次の通りである。

紀渻子為王養鬬鶏。十日而問、「鶏已乎。」曰、「未也。方虚憍而恃気。」十日又問。曰、「未也。猶応響景。」十日又問。曰、「未也。猶疾視而盛気。」十日又問。曰、「幾矣。鶏雖有鳴者、已無変矣。望之似木鶏矣。其徳全矣。異鶏無敢応者、反走矣。」
（『荘子』達生）

これは、王が紀渻子に闘鶏の鶏を養わせた時の話である。訓練から三十日まではまだ、戦える状況ではなかったが、四十日目にして、他の鶏の声を聞いても反応せず、木彫りの鶏のようになった。徳が身につき、どんな鶏もこの鶏の姿を見ただけで逃げ出してしまうようになった。つまり、心を無にして無為自然の境地を体得した状態、つまり、無心の状態こそが真の強さだという話である。そして、この文章を読解したあと、いつも次のような双葉山のエピソードを、プリントにして紹介している。概要は以下の通りである。

双葉山は、六十九連勝が止まった時、親交のある思想家、安岡正篤（やすおかまさひろ）氏に「いまだ木鶏たりえず」という電報を送った。その出典は『荘子』のこの文章である。双葉山は「木鶏」の揮毫を稽古場に掲げ、朝晩、額の前に座って自ら「木鶏」になるべく修行に励んでいた。後に、横綱の白鵬が次のように述べている。

「『かねて身に付けたもの』が、いつでも出て来るようにするには『無意識の内に技が出る』必要がある。つまり土俵上での理想的な取り組みとは〈無心〉になる事であって、作戦を考えるのではなく〈相撲の流れに応じて身体が自然に反応〉できれば良い。相撲は気持ちや技といった部分にこだわりがちであるが部分にこだわると相撲はとれない。それよりも無意識（勝つという邪念を捨てる）に相撲をとることが大事であり、私（白鵬）は座禅を組む事によって瞑想（無の境地）の感触を掴める様になってきた。」（『白鵬翔　相撲よ！～いまだ木鶏たりえず～に横綱の品格を学ぶ』より）

「無の境地」になるということは、スポーツ選手であれば、理解できるだろう。勝つことにこだわらず、自分を無にすることが勝利への道なのである。「木鶏」の話に共感した双葉山が、いつも稽古場でこれを座右の銘として、練習に励んでいた話は、漢文の言葉が、人の心の支えとなったという証拠でもある。道家の思想以外にも漢文にはこうした言葉が多いのは、周知のことである。

③漢文と自分との関わり

この他、漢文を学ぶことが、ものの見方、感じ方、考え方を深めることにつながっている例として、次の老子の「無用之用」をあげる。

三十輻共一轂。当其無、有車之用。挺埴以為器。当其無、有器之用。鑿戸牖以為室。当其無、有室之用。故有之以為利、無之以為用。（『老子』十一章）

車輪は、轂の空洞があるからこそ、役割を果たすことができる。器は器の中の空洞があるからこそ、役割を果たすことができる。部屋も中に空間があるからこそ、役割を果たすことができる。形があるものが利益をもたらすのは、形のないものが役割を果たすからだという話である。

一見、役に立ちそうにないものが、役に立つという考えは、自分の生活を振り返るといろいろなものに気づくであろう。生徒も、似たような例として、管楽器の空洞や掛け軸の余白などを挙げる。その後で、例えば無駄で役に立たないような仕事でもこつこつやっていると、後に自分の仕事に役に立って成功につながるような話も紹介する。この文章を読んだ時はわからなくても、生徒たちが人生の中で様々な経験を経る中で、ふとこのような文章を学んだことを思い出すかもれ

ない。広く様々なことを学び、「知」の蓄積をすることが、自分の力を養うことであり、無駄で役に立たないようなことでも、それは人を作り上げることにおいては重要であり、無駄ではない。折に触れ、このような話ができることも漢文の楽しさである。

以上、道家の思想と現代社会との関わりについて考えてきた。中国の古典、特に道家の思想は、現代においても世界で多くの人に読まれており、生きることに行き詰まった時の拠り所として、自分らしく生きるためのヒントを与えてくれるものであった。ある時は発想のヒントとして、また、ある時は座右の銘として大きな役割を果たしていた。これらのエピソードは、漢文からはまだまだ多くのものを学ぶことができるということを物語っているのではないだろうか。現代において、漢文を知らなくても何ら生活に困ることはないであろう。しかし、自分たちの精神面における生き方をより充実したものにするという観点から考えると、漢文はこのまま朽ちさせてはいけないものである。したがって、授業においてもこのような漢文の役割を大いに発揮させるような工夫を、ぜひ取り入れていくべきだと考えた。

2 漢文が社会や自分との関わりの中で生かされるようになる授業とは？

それでは、現代において、漢文のこのような役割を生かすために、私たちは教室でどのような授業をすればよいのだろうか。次にこの点について考えて行きたい。まず、古典の学習意欲が高まらない要因として、文法だけ教えて終わりという授業形態があげられる。教育実習の大学生に、高校時代の古典の授業について尋ねると、多くの学生が品詞分解中心の授業であったと教えてくれる。古典文法で終わる古典ほど退屈で面白くない授業はないだろう。漢文の場合も、原文を現代語訳しただけではわかりづらい。つまり、現代語に訳すことができればいいというだけでは、作品の世界に入ることはできない。中野孝次、加島祥造、湯川秀樹も、現代語訳だけで『老子』を理解することは、とても難しかったと述べている。漢文を読む場合にも、現代文を読む場合と同じように、内容を理解できるような、わかりやすい読解が必要である。たとえば、全体の構成や展開を捉えてあらすじをつかんだり、情景や人物の心情を捉えるプロセスが必要である。そこで、まず、現代語訳をしただけでは理解できない漢文をどう読むかについて考えていきたい。

(1) 漢文は現代語訳の後が大切

ドイツ文学者の中野孝次は『いまを生きる知恵』の中で、「老子」をおもしろいと感じたのは、加島祥造の『タオ―老子』を読んでからだと述べている。[*6]

「漢文の読み下し式では読んでもわからないし、おもしろくもなんともないのです。そこで、老子はなんとなく私の中に入って来なかったのですが、…」

そのような彼が、

「私は加島祥造訳で老子のおもしろさを知ったのです。加島祥造は英文学者ですから、英語訳の老子―それは何十種類とあるようですが―を読んで、英語の訳者は実に自由に訳している、しかも文学として訳しているのに感心して、こんどは彼自身が老子の創造的な翻訳に取り組んだというものです。」

また、加島祥造は『タオ―老子』のあとがきに次のように書いている。[*7]

「私は西欧文化に甦った「老子」を英語からキャッチした。それ以前の私は、現代のこの国の多くの人と同じように、原文や和訓を読んでも、「老子」がわからず、「老子」とは理解できないもの、ときめこんでいた。」

「一九九三年刊行の『タオ・ヒア・ナウ』（パルコ版）―これが私の最初の「老子」訳へのチャレンジだった。原文を参照せず、幾冊もの英語訳「老子」本を元にして、生きた口語訳を試みたのだった。」

「今度のこの仕事は、…私はまず原文と注釈を見た、そして次に中国人の英語訳と西洋人の英訳を深く読んでから、自由口語訳へ向かった。」とある。

つまり、加島祥造の訳文は、原典からではなく、英語を日本語に訳したものであった。書き下し文や現代語訳でも理解できなかった『老子』が、すらすらと頭に入ってくるのであれば、漢文へのアプローチはいろいろな形があってもいいのではないだろうか。実際に加島祥造の訳文をみていこう。例えば『老子』の「無為之治」である。教科書でもよく扱われる教材である。

不尚賢、使民不争。不貴難得之貨、使民不為盗。不見可欲、使民心不乱。是以、聖人之治、虚其心、実其腹、弱其志、強其骨、常使民無知無欲、使夫智者不敢為也。為無為、則無不治。（『老子』三章）

これをそのまま現代語訳すると次のようになる。

【現代語訳】

賢者をあがめなければ、民衆に争わなくさせることになる。手に入れにくい財宝を大切なものとして尊ばなければ、民衆に盗みをしなくさせることになる。欲しがるものを示さなければ、民衆の心を混乱させなくすることになる。こういうわけで、聖人の政治は、人々の心を空っぽにして、その腹をいっぱいにし、その意志を弱くして、その筋骨を強くして、常に民衆に無知無欲でいさせ、知恵のある者に行動しようとさせないのだ。無為の政治を行えば、世の中が治まらないということはない。

現代語訳だけを読むと「賢者をあがめなければ、民衆に争わなくさせることになる。」「知恵のある者に行動しようとさせないのだ。」とあり、「知識」を重視する現代人にとっては、とても違和感がある。また、老子が言いたいこともわかりづらい。これを加島祥造は次のように訳している。

【加島祥造『タオ―老子』の訳文】

飯だけはたっぷり喰う
世間が
頭のいいやつを褒めるもんだから
ひとはみんな
利口になろうとあくせくする
金や宝石なんかを大事にするもんだから
盗人がふえる。
世の中が
生きるのに必要のないものまで
やたらに欲しがらせるから
みんな心がうわずってしまうんだ。
だから道につながる人は
あれこれ欲しがる心を抑えて
飯だけはたっぷり喰う。
野心のほうは止めにして
骨をしっかりこしらえるんだ。
みんなが
無用な情報や無駄な欲を持たなければ
ずるい政治家や実業家だって
つけいる隙がないのさ。
そうなんだ、
無用な心配と餘計な欲をふりすてりゃあ
けっこう道はつくもんだ、
行き詰まっても―。

加島祥造は知恵に関する箇所を「世間が頭のいいやつを褒めるもんだから　ひとはみんな利口になろうとあくせくする」、「みんなが無用な情報や無駄な欲を持たなければ　ずるい政治家や実業家だってつけいる隙がないのさ」と訳している。これによって、「知恵のある者」が、「ずるい政治家や実業家」につながっていることがわかる。この文章は、時代背景を知らないと分かりにくい。老子の生きた時代は、諸侯が覇権を争い、儒家をはじめとした遊説の徒を賢者として登用し、富国強兵を進めていった時代である。「知恵のある者」とは具体的には儒家を初めとする「遊説の徒」を指している。国を強くしようとすればするほど、民衆は苦しい生活を強いられる。これを批判したのが老子であった。この時代背景がはっきり分からなくても、加島祥造の訳文は、一回読んだだけで理解できる。これは、加島祥造が英訳から訳したことによるものである。彼の日本語訳は、他の作品を読む際にも、文章の内容を深める上で、大いに役に立った。研究の裏付けがあるものに限るが、現代語訳をすることだけでは内容がわかりにく場合は、このような文章を用いるなど、生徒の実態に合わせていろいろなアプローチの方法があってもいいのではないだろうか。

(2) ディスカッションを取り入れた授業

文章の内容を把握した後、個人の中でその内容を消化させ、深めていく一つの方法として、ディスカッションを取り入れることも効果的だと考えられる。他の人の考え方を知り、自分の意見を発表することで「ものの見方、感じ方、考え方」を深めることができる。ここでは、法家の韓非子の「公私相背」を取り上げた。

楚人有直躬。其父窃羊而謁之吏。令尹曰、「殺之。」以為「直於君、而曲於父。」執而罪之。以是観之、夫君之直臣、父之暴子也。魯人従君戦、三戦三北。仲尼問其故。対曰、「吾有老父、身死莫之養也。」仲尼以為孝、挙而上之。以是観之、夫父之孝子、君之背臣也。故令尹誅而楚姦不上聞、仲尼賞而魯民易降北。上下之利、若是異也。而人主兼挙匹夫之行、而求致社稷之福、必不幾矣。古者蒼頡之作書也、自環者謂之私背私謂之公。公私之相背也、乃蒼頡固以知之矣。今以為同利者、不察之患也。(『韓非子』五蠹)

この話は、孔子の徳治主義を批判し、法治主義を主張したものである。楚の国の直躬は父親が羊を盗んだことを役人に告げたために殺された。また、魯の国の人は年老いた父親を養うために戦場から逃走したが、孔子は彼を親孝行だと称賛した。その後、楚の国では悪事が君主の耳に入らなくなり、魯の国では人々が戦場から逃げるようになった。国家の統制がとれなくなったのである。そこで、韓非子は「公私」両方の利益を求めることは無理であり、「私」よりも「公」を優先しないと国家を治めることはできないと主張した。この話はディスカッションをするにはとても良い素材になる。特に直躬の話は、「正直」というプラスの概念が、反対に父を死に至らしめたマイナスの概念にもなり得るものであることを示している。一般的な概念だけでは解決できない重大な問題を提起していると言えよう。直躬の話は、次にあげた作品にも取り上げられている。

○『論語』…孔子が「本当の正直者とは父は子のために隠し、子は父のために隠すので、直躬は正直者ではない」と述べている。(子路篇)

○『呂氏春秋』…このあと直躬が父の身代わりに処刑されることを申し出て、刑場に連れて行かれたが、正直者で孝行者だという理由で刑を免れる。これに対して孔子は「一人の父で信と孝の二つの名声を博すような正直なら、ない方がましだ」と直躬を非難している。(当務篇)

○『荘子』…「男子たる者が自分の言葉を正しいとし、自分の行為にこだわるために、このような災禍や思いにかかるのである」と説く。(盗跖篇)

○『淮南子』…「直躬は父親が羊を盗んだことを証言したために死んだ。これではどんなに誠実であっても、一体誰が尊敬しよう」とある。(氾論訓)

『韓非子』では直躬を評価したのに対し、『論語』『呂氏春秋』では非難し、『荘子』『淮南子』では、直躬を単に「信」に固執する愚かな者として描いている。これらの話も紹介しながら、自分であればどういう選択をするのかを考えさせたい。どの立場をとるかは結論があるわけではない。現代社会においても、正解のない問題は多い。生徒が自分で考え、意見を戦わせることは、現代の社会を考える上でも大切なことである。また、ディスカッションが難しいようであれば、PCを活用して、フォームで感想を書かせ、それをクラスで共有する活動も可能である。今回は思想教材を中心に提案をしてきたが、思想以外にも「漁父辞」や「項羽と劉邦」など漢文の話には、ディスカッションが可能な文章が多い。授業の中でディスカッションの時間をとるのは難しいが、ただ現代語訳だけで終わらせず、自分の考えを深めさせるという点では効果的である。

③漢文の学習に一律に活動を組み込むことの危険性

新学習指導要領には、

「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。」との指摘[*8]がある。

しかし、教科の特性上、そうならざるを得ない面もある。古典の授業を考えると、活動は授業をより理解するための一助として取り入れていかなければ意味がない。古典の場合は「自由に自分の力で読んでみよう」では、独りよがりの解釈が出て、今まで研究者が積み重ねてきた研究成果も踏まえないものになる。やはり、最初は知識を入れることから始めないといけないのではないだろうか。古典は、内容を理解し、自分のものになってはじめて、活動が可能になる。

たとえば、『老子』の「無為之治」において「知識が必要ないという考えはおかしい」という結論になるような話し合いをさせてはいけない。また、漢詩の鑑

賞も、作者の経歴や時代背景、さらに今までの研究成果を踏まえずに行うのも危険である。最終的に話し合いの結果をどこに落ち着かせるかという見通しのない活動は、かえって生徒を違う方向へ導いてしまう。つまり、教員自身がある程度、最終的にどういうところに話し合いを持って行くかという見通しをたてないと、活動としての意味がない。また、新学習指導要領では

「古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり報告書などにまとめたりする」

などの具体的な言語活動例が示[*9]されている。最近は、ネットを利用して、調べ学習をさせたりすることも多い。しかし、ただ単にネットの情報をコピペして、調べ学習がよくできたと褒めていいのかも疑問である。生徒は授業の予習でも、ネットで検索して、教科書の作品の現代語訳をそのままノートに写して来る。自分で苦労して訳してみようとしない生徒が増えている。どうしてそのような訳になるかということを、自分で考えようとしていない。だから予習したとしても力がつかない。教育実習生でさえ、本を調べるよりも、ネットで検索して、それをコピペして授業に使っていた。授業としては成立していたが、ネットでの情報は玉石混淆であり、間違った情報もある。ネット上の情報を鵜呑みにした結果、長い間の研究の蓄積を無視するようなこともある。自分でしっかり調べるように注意しても、どの本をどのように調べればよいのかわからない。漢和辞典をこつこつひいたこともなさそうであった。今後、ネットから情報を取り入れ、ＰＣを利用した授業が提案されていく時代が来るであろう。その際、教える側は、生徒が調べてきた資料がネットの情報をそのままコピペしたものであった場合は、それを注意し、正しい調べ方をアドバイスできる力がないといけないだろう。そのためにも、教員は常に教材研究を怠ってはいけないのである。

3　これからの漢文教育

本論文において、1では、道家の思想と現代社会との関わりについて考察し、道家の思想が海外で多くの人に受け入れられていたことを取り上げた。また、日本においても、発想のヒントや、生きるための拠り所になっていた漢文の役割を見てきた。ここでは思想に関する作品だけであったが、他のジャンルの作品に関しても同じような視点で漢文を捉えることができるだろう。また、2では、漢文が生かされるようになる授業を考えてみた。これらを通して、今後の漢文教育はどうあるべきかについて、提案をしていきたい。

(1) 教養とは長いスパンで考えるもの

高校で漢文を学んでも、多くの生徒が受験が終わり、社会人になってしまうと漢文とは全く縁がなくなってしまう。しかし、年齢を経て人生経験を重ねる中で「荘子はこういうことを言いたかったのか、その気持ちはよくわかるなあ」とか、「友人と別れる時の気持ちは、あの漢詩にあったものと同じだ。上手い表現だったなあ」と生活の中の一コマで、漢文で学んだものが思い出されることの方がより重要なのではないだろうか。長い間忘れていてもいい。すぐに生活に役立つもの、目の前の利益だけを考えるのではなく、生活の中でふと思い出すことによって、人生が豊かになるのであれば十分ではないだろうか。

教養とは人生の長いスパンで考えなくてはならないものであり、高校生が今日学んだからすぐにそれを理解して、生活に役立てていくものではない。学んだことが多くの人生経験を経る中で熟成され、生きていく際の拠り所となるのが漢文であり、古典であると考える。

(2) 学校教育は漢文とつながる唯一の場

一般の人が人生で漢文に触れるきっかけは、やはり学校教育である。漢文を原文で読むことができるのも、学校教育であろう。ここで学ばなければ、一生漢文を知らない生徒も出てくるかもしれない。あるいは、この教育があるからこそ、社会人になった時にもう一度漢文を読もうという人も出て来るのではないだろうか。学校での漢文教育は、日本文化の継承のための重要な役割を果たしていると考えられる。そこで、社会人になって、もう一度古典を読んでみたいと生徒に思わせるためには、どのような授業を展開させればいいのだろうか。中野孝次や加島祥造のように、現代語訳だけではなく、英訳の利用などの別のアプローチがあってもいいだろう。または、湯川秀樹が漢文に興味を持ったように、漢文の素読が役に立ったこともあった。どういう形であれ、生徒自身が自分の生き方やものの見方と結びつけて漢文を読むことができるようになることを期待したい。古典を読んだことで、自分のものの見方や考え方に変化があったという体験をすること

がとても重要であり、それが社会に出ても、古典に興味関心を持ち続けることができるきっかけになるのではないだろうか。生涯、古典を読み続けている人は、社会の中のほんの一部の人間かもしれない。現代においては、学校教育の中でしか触れることのない古典であるからこそ、どういう授業をすれば、それがその人の一生に残るかを考えながら、授業を組み立てることが大切ではないだろうか。

(3) 漢文教育における今後の課題

これまで学習指導要領は数年の周期で変化し、生徒にゆとりを持たせるために内容が精選された時もあり、またその反動として知識をしっかり身につけさせようと内容を増やした時もあった。さらに教員の一方的な授業ではなく生徒の主体的な学びを目指し、アクティブラーニングが唱えられたこともあった。そして、今回の学習指導要領では、「現代文」の文学教材が「言語文化」に入り、古典とともに教えることになった。さらにデジタル機器の活用も急速に進んだ。こうした振り子のように揺れる国の方針によって、現場の教員は翻弄され、常に新しい指導方法を要求される状況に置かれている。これらは、本当に現場からの声を反映したものなのか疑問ではあるが、最近ではそういったものに振り回されない、核心のようなものを教員が持っていることの方が必要ではないかと考えるようになった。教員が怠ることなく教材研究を行い、しっかりとした教材観を持ってさえいれば、学習指導要領が変わっても、ぶれることはない。いくら新しいやり方を取り入れても、しっかりとした教材の読みができていないと、良い授業にはならない。

以前、電車で漢文を読んでいた時、隣に座った中国人に「あなたはこれが読めるのですか？素晴らしいですね。中国人でも読めませんよ。」と話しかけられたことがある。確かに中国人にとっては、自分の国の古典である。中国人にとっても古典は難しいもののようである。そのような中国の古典を、日本人は祖先が考え出した訓読という方法で、日本語として読むことができる。さらに本家の中国に肩を並べるだけの研究もある。日本人はこれらの文化遺産を持っていることを誇りにして、後世に伝えていくべきである。

最後になるが、古典が軽視されるのは、大人にも責任があるのではないだろうか。高校生の古典に対する学習意欲が低いのは、生徒の責任だけではなく、社会全体が、古典に価値を置いていないことにも起因するのではないだろうか。戦後、日本社会は経済や科学技術の発展に力を入れて来た。こうした中で「人としてどう生きるか」を考えるには、あまりにも余裕がなかったのかもしれない。古典に対する学習意欲を高めるためには、まず、社会全体が文化に対する意識を高めることが必要であろう。

（注）

＊1　文科省『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）国語編』
　第1章　第2節　国語科改訂の趣旨及び要点　(2)科目構成の改善
＊2・6　中野孝次『いまを生きる知恵』p122
　第九回　無為の思想老子　訳から知る老子
＊3　「…」は本文を一部省略したことを示す。引用文、以下同じ。
＊4・7　加島祥造『タオ―老子』p230　あとがきⅡ
＊5　『自然に論理をよむ』p43　Ⅰ　●湯川秀樹　東西の思想
＊8　文科省『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）国語編』
　第1章　第2節　国語科改訂の趣旨及び要点
　（中央教育審議会答申における国語科の成果と課題）
＊9　文科省『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）国語編』
　第1章　第2節　国語科改訂の趣旨及び要点
　(8)各科目の要点【古典探究】

【参考文献】

中野孝次『いまを生きる知恵』岩波書店　二〇〇二年
加島祥造『タオ―老子』筑摩書房　二〇〇〇年
日本の科学精神 2 自然と論理『自然に論理をよむ』
　監修　伏見康治　工作舎　一九七八年
白鵬翔『相撲よ！』角川書店　二〇一〇年
文科省『高等学校学習指導要領解説（平成30年告示）国語編』平成30年